

人間科学研究所通信

Newsletter of the Institute of Human Sciences
Musashino University

第9号

目次

Contents

社会福祉学科むらさき会・同窓会

テーマ：『コロナ禍をともに生きる』

・講演：小松美智子氏 ——— 2

・それぞれの立場から向き合った

コロナ禍とは? ——— 3

現役学生の視点から

新社会人の視点から

専門職の視点から

一般市民（子育て）の視点から

2020年11月29日社会福祉学科むらさき会・同窓会（人間科学研究所共催）が、オンラインにて開催されました。本学の教育にご尽力された小松美智子先生にご講演をいただいた後、それぞれの立場の方々が、コロナ禍をどう向き合ったかについて、体験を分かち合いました。

**「人間科学研究所共催」
オンライン開催!**

むらさき会

こんにちは！武蔵野大学むらさき会実行委員会です。
今年のむらさき会は人間科学研究所との共催でオンラインにて開催となりました。
内容は小松先生の講義など日ごろ思っていることをそれぞれの立場から話してホッと一息つく時間を持てるような企画となっております。

日時：令和2年11月29日 15時～17時
参加方法：下記のURLにアクセスし、参加申し込みフォームに必要事項を入力された方に、当日に開催されるZOOMミーティングID、パスワードをお知らせいたします。

内容：15:00～ むらさき会 開始
・学科長挨拶 渡辺 裕一 学科長
・教員、むらさき会実行委員の紹介
・小松先生の紹介
・ZOOMの操作方法の説明

15:25～15:50
小松先生講演「コロナ禍における連携（仮）」
～コロナ禍の体験を語り、みんな集ってホッとする会～

15:50～16:15 パネルディスカッション
それぞれの立場から向き合ったコロナ禍とは？
①企業人としての視点から（一般企業に勤務する卒業生の経験）
②専門職の視点から（相談支援職における経験）
③新社会人の視点から（大学生から新社会人への移行期での経験）
④市民の視点から（生活者の視点から、子育て、親族の介護等のサービス ユーザーの視点…）
⑤現役学生の視点から（大学生の視点から）
⑥教員の視点から

16:15～16:40 ブレークアウトセッション

16:40～16:50 振り返り
・感想の共有及び質疑応答
・小松先生によるまとめ

16:50～16:55 閉会

ぜひ気軽にご参加ください。お待ちしております。

武蔵野大学むらさき会実行委員会

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University

武蔵野大学

講演：小松 美智子 武蔵野大学客員教授、女性の暮らしやすさを考えるソーシャルワーク研究会

コロナ禍をともに生きる！-みんなで語ろう-

はじめに

今日は社会福祉学科の同窓会です。例年は多くの卒業生と先生方が美味しい食事や飲み物を囲み、歓談を中心に楽しい時間が繰り広げられていました。久しぶりに母校に戻り、なつかしい顔に会って、思わず声も大きくなるそんな楽しい時間を今年も過ごせるはずでした。ところが、今年は想像もなかったコロナ禍、こんな時だから中止するという判断があります。でもこんな時だからこそ、できる形で継続することに意味があるとオンラインで開催されています。こんな時だからこそみんなの顔を見ることができ、思いを言葉

にする機会としてむらさき会が開催されることに大きな意味があると思います。

今日お話しするテーマを「コロナ禍をともに生きる！-みんなで語ろう-」にしました。今日も朝からテレビをつければコロナの話題ばかりで、もううんざり、という思いもあるかもしれませんが。みんな共通に今まさに体験していることをこんな時だからこそみんなで語り合う場にしたいと思いテーマにしました。

● 新型コロナウイルス感染症（新型コロナ）の発生

2020年2月コロナ禍は突然やってきました。

新型コロナによって、私たちの生活は一変しました。当たり前だった生活が当たり前ではないことを思い知らされました。町から人の姿が消え、学校からは子どもたちの声が消えました。このような光景は全世界同時に広がりました。感染者数は緊急事態宣言による自粛で一旦取まったかに見えましたが、夏には増加し、冬には次の第3波が来るのではないかとわれています。

● 新型コロナウイルスとは？

厚労省のホームページでは、コロナウイルスには、一般の風邪の原因となるウイルスや、「重症急性呼吸器症候群（SARS）」や2012年以降発生している「中東呼吸器症候群（MERS）」ウイルスが含まれ、飛沫感染、接触感染で感染します。閉鎖した空間で、近距離で多くの人と会話するなどの環境では、咳やくしゃみなどの症状がなくても感染を拡大させるリスクがあると解説しています。予防対策としては、ワクチンが普及されていない現状では、マスクを正しくつけること、会食の場を減らし、日常の接触する人の数を減らすことなどがあげられています。

● 新型コロナウイルスがもたらす3つの感染症

このウイルスは、単に病気を引き起こすというだけでなく、「3つの感染症」の顔があると日本赤十字社石川支部では伝えています。

第1の感染症は一般的な生物学的な意味の感染症です。

第2の感染症は、心理的感染症です。未知の見えないウイルス、治療方針が確立していないことから来る不安や恐れを強く感じる感染症です。

第3の感染症は、社会的感染症です。社会的感染症とは、不安や恐怖が、私たちの中に高まってくると、それが嫌悪や差別、偏見という気持ちが出現してくるということです。このため感染を隠したり、感染のリスクがある仕事に従事している人を遠ざけたり、いろいろなことが起きています。

未知の感染症に対して私たちは差別や偏見を持ちやすく、病気になりたくていない人はいないはずなのにその差別や偏見が、病気の人をさらに傷つけ、苦しい思いにさせてしまうことをハンセン病の歴史やHIV/AIDSの流行時から学んだはずなのにこの感染症によっても同様に繰り返されています。

● 新型コロナが変えていった社会

新型コロナウイルス感染症は、2019年12月、中国湖北省の武漢で原因不明の肺炎患者が確認されたという報告から始まりました。その後あっという間に全世界に感染が拡大しました。日本では、2020年2月初旬、ダイヤモンドプリンセス号内での感染拡大、下旬には北海道で小中学校の休校要請、首相によるイベント自粛要請、全国の小中学校の臨時休校要請、3月に入り、海外からの入国制限、新型コロナウイルスで特措法成立、東京オリンピック延期、そして4月7日、7都府県に緊急事態宣言を発出、中旬には全国に拡大と次々と生活が縮小していく状況が続く、当たり前と思っていた生活が当たり前ではなくなってきました。

緊急事態宣言は39県で5月中旬に解除となり、東京も5月下旬に解除になりました。7月下旬からGOTOトラベルが開始され、東京が加わったのは10月以降ですが、その後全国的に感染者数が増えています。

● 新型コロナと女性不況

新型コロナによって大きな影響が出ているのが女性といわれています。失業者数や自殺者数の増加、DV相談の増加などがあげられています。新型コロナは、社会全体に大きな経済的ダメージを与えていますが、特に女性に大きな影響が出ています。これは女性に不利な社会構造が新型コロナ感染拡大によってあぶりだされたと言えます。新型コロナによって影響を大きく受けた飲食業などで非正規労働者として働いていた女性たちが解雇され、小学校の休校や保育園の休園による影響、特にひとり親の女性たちには深刻な影響が出ています。自粛が求められても家が安全ではない女性や子どもたち、居場所も相談のすべもなくした人たちが多く出てきました。また、女性だけでなく、演劇や音楽関係、イベント関係など、ふだんの暮らしの中では経済的困難とはつながりにくかった職域にまで、深刻な影響を及ぼしています。

● 私たちへの影響

ここまで、突然、私たちの生活を変えて行った新型コロナウイルス感染症の特徴や社会の変化、生活に与えている影響などお話ししてきました。今日ここに参加くださっている皆さんはいろんな領域でソーシャルワーカーとして支援する立場の卒業生、一般企業に勤務する卒業生、新社会人として一歩を踏み出そうとしている方、子育て、親族の介護等をされている方、現役の大学生、教員などさまざまな立場の方々です。皆さんも大きな影響とさまざまな思いをお持ちだと思います。

私の個人的なことになりますが、私は3月で武蔵野大学を定年退職しました。仕事を続けることにこだわってきて、その幕を下ろすときに新型コロナがやってきました。ちょうど大学を去るころからイベント自粛が始まり、予定のすべてが中止になりました。私にとっては大きなライフイベントの時だったのですが、最後の卒業式も引き受けていた研修や講演などの仕事関係も退職にまつわる会や友人たちの集まりも家族旅行もみんな中止になりました。職業人としての最後に新型コロナに巻き込まれたくないという思い、少なくとも感染して医療崩壊の原因にならないようにしようという思いから自宅に閉じこもりました。やはり見えないウイルスに対する怖さがありました。同時に予定がどんどんなくなっていくのは悲しく、喪失感でいっぱいでした。奮い立たせるように片づけをして、紛らわせていました。コロナの影響は決して平等ではなく、もともと不安定な生活や、ギリギリで持ちこたえていた人たちが直撃し、「家にいるように」と言われたその家が安全でない人たちがたくさんの中で、何もできない無力感と悲しいなんて気持ちを口にはいけないうような思いで押し込めていたような気がします。今、少し落ち着いてきてみるとその当時はカラ元気だった自分を認めることができるようになっていきます。

私の仲間の医療機関のソーシャルワーカーの現状を紹介します。自粛といわれて世間はいろいろ文句を言ったけれど、休むわけには行かない、感染の危険性はありながらも仕事に行かざるを得ない毎日、感染者を出すことは医療機関としては避けたいといけなく、コロナの患者を診ている病院もそうではない病院も経営的には大変な危機的状況になっています。そんな中で医療ソーシャルワーカーは人と会えない孤立感やプライベートでの行動制限と求められる自己責任、世間との乖離からストレスフルな状態に陥っています。さらにソーシャルワーカーとしての思いは、判断や行動基準があいまいな中でのもどかしさと重責と今までのソーシャルワークができない不全感を抱えています。そんな中で今までソーシャルワーカーとして大切にしてきた専門性や価値を再確認する機会としてとらえています。病棟を越えて、多くのスタッフや、地域の関係機関と横断的に縦断的に連携しネットワークを張って動いていたこと、クライアントとの関係づくりも含めてプロセスを大切にしながら支援を行ってきたこと、クライアントを主体として支援していることなどあらためてソーシャルワークの専門性や価値を再確認しています。ソーシャルワーカーとしてのこの力強さは、まずやるせないもどかしい思いを言葉にして、安全な場で話すことによって出てきたものです。

皆さんそれぞれにいろんなしんどい思いを抱えておられると思います。しかし解雇や経済的困難やDVなど大変な状況に陥った人々や生活や命を守るために働き続ける人々を見た時に私たちの中にもあるもやもやした思いを押し殺して暮らしていませんか？ストレスはため込んでいて爆発してしまいます。まずは率直な思いを話してみませんか？

● コロナ禍をともに生きる

新型コロナやHIVエイズウイルス、エボラウイルス、など動物由来感染症の病原体は人間と自然界の接触によって人間に移行するようになったと言われています。環境破壊はいろんなひずみを生みだしていますが、感染拡大の原因の一つとも言われています。感染症は病気ですが、ただ病気というだけではなく、人の暮らしが引き起こしたのもいえます。このまま開発という名の破壊を続けていってもいいものなのか大きな課題を私たちに投げかけています。

フランスの経済学者であり思想家のジャック・アタリ氏は自動車・航空・化学など産業重視、経済的發展、右肩上がりの経済成長など必要ではあるが、どこまで求めるのか、そこから医療保健・福祉・教育・研究・食糧など命に関わる分野を重視する方向転換の必要があると言っています。

これは私たちの分野です。福祉学科で福祉的なものの考えを共に学んできた皆さん、皆さんの出番です。ソーシャルワーカーとして職をお持ちの方はまさに、これからますます支援が必要な対象者が増えていきます。私たちが疲弊してしまわないように、ストレスをため込んで燃え尽きてしまわないようにしたいものです。この感染症は人と人の関係を分断します。何でもない語り場を奪います。コロナ禍によって増え続ける支援を必要とする人々をサポートできるように私たちが少しでも元気でいられるように思いを言葉にする機会を作ることが大切です。

そして、目の前の課題を解決していくために踏みとどまるとともに、これからの社会をどんな社会にしたいのか共に考え、少しでもみんなが暮らしやすい社会づくりを共にめざしましょう。

どうぞ今日のような安心して思いを言葉にできる機会をいろんな場所でたくさん作ってください。そしてまた来年、お会いしましょう！

● 現役学生の視点から

大塚舞 社会福祉学科 3年

オンライン授業の利点は、通学時間と定期代が削減できた点です。しかし友達と直接交流する時間が減り、実習に行けなくなりました。実習は、代替プログラムで多様なフィールドで活躍する方々から学ぶ機会となりましたが、楽しみにしていたので、少し残念でした。

アルバイトは特に影響はなくありがたい。自分が感染したら、周囲に迷惑を掛けるので気を付けています。

● 新社会人の視点から

三輪聡一郎 目黒区役所土木管理課 2019年卒業

コロナ禍の影響は、新人研修が全て無くなりました。そのような状態で、電話応対、名刺交換、文書作成などの業務に従事していたので、不安感と共に半年間仕事をしてきました。

新入社員にとって、よくわからない通常業務に加えてコロナ対応による新規業務の増加はすごくきつい、大変だった半年間です。

放置自転車の撤去や整理は、実際には公務員ではなくシルバー人材センターの高齢者の方々に業務委託をしています。そこで、高齢者の方にコロナ感染リスク高い中、仕事を頼んでいいのか、依頼しないと放置自転車が増えるというジレンマの中で上司と相談しながらやっています。

コロナ禍での仕事の大変さは、このような調整や今後の方針を1年目の私が判断しなければならなかったことです。しかし、表現は難しいのですが良かったことは、自粛期間中のテレワーク業務時には、時間を調整して公務員として必要な知識を高める等、自己研鑽の時間を作ることができました。

● 専門職の視点から

吉野愉美 医療ソーシャルワーカー

医療ソーシャルワーカーのインタビューで、「他人と会わない孤立感とか自分たちは行動制限をずっとしていかなきゃいけないという世間との乖離の中で、軽いうつ状態があり、ストレスフルな状態がずっと続いている」とありましたが、まさにそのとおりです。その中でも「差別・偏見」がストレスとなります。

当院がコロナ病棟ということで名前が出ているため、当院への通院を理由に、勤務先から「在宅ワークにしてくれ」、「もう出勤しないでくれ」と言われた患者さんがいます。私も、病院勤務ということで、親戚から少し嫌がられてしまったり、苦しい思いをしているというような状況です。

プロセスを大事にしたソーシャルワークをという点に関しては、入院の場合は全員、PCRの結果が出るまでは隔離病棟という対応のため患者さんにも会えない。面会も完全禁止、家族とも電話でのやり取りが中心で十分な面接ができない、他機関とのカンファレンスにZoomを使用している言葉の細部とか、表情などが十分に理解できない。そういうところを私たちはこれまで大切にしながら面接をしていましたが、それも何かままならない不安全感と戦いながらやっている状況です。

院内全体もちろん、現在配属されている呼吸器内科の病棟では、医師たちも戦々恐々としており、常にびりびりとした現場にいます。また、院内クラスを絶対起こさせてはいけないというプレッシャーがあります。もちろん自分が感染源になってはならない。病気を抱えている患者さんが目の前にいる状況のため、シビアになっていると思います。

あとコロナに付随した問題として、DVとか虐待の問題、経済的な部分で「がんの治療費なんて払えません」みたいなことが顕在化してきています。一方、緩和ケア病棟では、面会ができないがゆえに、がんの末期の患者さんと、もう面会できない、また息子さんとかが在宅ワークで家にいるので、在宅を選択される患者さんとかも増えてきていて在宅へつなぐケース、ニーズも増えてきたというのが、現状です。

● 市民の視点から

久保田敦子 (旧姓：坪池)

私は今、専業主婦という立場で、上の娘が今6歳、下の娘が3歳です。3月に当時、年中だった長女の終業式が早まり、そこからずっと休園でした。元々親族が近くに住んでいないため、自分が通院したい時や何か疲れた時などは市内の一時保育を利用して気分転換を図ったりしていました。疲れても何があっても助けを求める術がなく、子どもと常に過ごすという生活が数カ月続きました。特に緊急事態宣言が出てからは、家からほとんど出ない生活をしていたので、狭い世界に無理やり閉じ込められたような、そんな感覚に陥りました。

6月に入って幼稚園が再開して、長女が年長になって、次女も年少で入園ができた

神山まこと 社会福祉学科 3年

オンライン授業のデメリットは、学校で勉強できないことです。私は自宅で勉強する習慣が無いため、学校で勉強できることが「恵まれていること」だと実感した半年でした。私はコロナ禍の前は、一人暮らしでしたが、3月中旬に実家に戻りました。そのため、大学の友達と気軽にコミュニケーションを取るのが難しく、孤立感をすごく感じました。

実習のオンライン化はメリットがあったと思っています。選択分野以外の多様な視点で課題を考える機会は、貴重な体験だったので良かったです。

稲葉美幸 富津市社会福祉協議会 2019年卒業

4月中旬から交代勤務が開始されましたが、個人情報を取扱うという仕事の性質上、在宅勤務が難しく困難な仕事環境となりました。その後、通常勤務になった時には体調は崩していないのですが体が保てなくて、慣れるまでにかなりの時間がかかりました。富津市は、昨年9月の台風被害の影響も大きく、社協で貸付けを行っています。そこに、コロナの影響による貸付けが重なりました。もう長期にわたり生活のいろいろなところに影響が出てきている方がたくさんいます。

コロナで私が不安な点が2つあります。社協は市役所の中にあるので、もし自分が感染したら職場の人だけではなく、地域住民も、市役所にも影響が出ることです。そのために感染防止を徹底しています。

更に、1年目で積み残した業務を2年目にやるため確実に仕事量が多くなることです。これらの点を受け入れながら、頑張っていきたいです。

原田知香 ウェルビー株式会社 (旧姓：小幡)

今年の9月まで、身体障害者の方の入所施設で介護の仕事をしていました。コロナ禍でもお仕事があるということ、収入に関してはあまり心配がなかったことはありがたかったと思います。しかし、使命感を持って仕事をする中で、ワーク・ライフ・バランスの大切さも気付かされました。

職員として感染させない、しないということが絶対のため行動制限があり、そのためにはプライベートで外出を控えることを徹底していました。しかし、仕事を頑張った反面プライベートが充実していないと、このバランスが崩れると、「心って弱っていくんだな」ということを感じました。

10月に現職の就労移行支援事業所に転職し就労支援員をしています。ここでは、何か仕事って生きることだなってすごく感じましたね。まだ私の所属する事業所では影響は出ていませんが、最近ニュースでは、障害者の方、特に知的障害者の方とかの離職、雇用が減ってきているようです。

離職数の増加というニュースが流れたり、あとは市役所のワーカーからは、就労移行支援の増加で、福祉の入口支援になってほしいというお話を聞くこともある。生活困窮者が増えて、そういう支援を使いたい人も増えてくると思います。経済と福祉って切り離せないなっていうところで、もう少し経済について勉強したいなっていう気持ちです。

プライベートでは、今年の6月に結婚、10月に転職など私も大きいライフイベントがある中でコロナだったので、そのライフイベントの中で大切にしたいなって思う気持ちもあれば、それは自分のわがままのかな、それをやったことで周りに影響があっただけじゃないかと思う部分があったり。プライベートも仕事も含めて、気持ちがすごく左右される、そんな1年でした。

ので、1日の中で子どもと少し離れる時間を取るようになりました。

それでも登園方法の変更や行事の中止や開催方法の変更など大きな変化により、子どもも戸惑っています。さらに、日常生活での「うがいや手洗いやマスクを徹底してください」「熱を測ってください」「ちょっとでも具合悪ければ、必ず小児科に連れて行ってから幼稚園行くか判断してください」など、細々としたルーティンが組み込まれていくような日常です。

今後の見通しも不透明で何となく精神的な負担感が抜けない、そんな日々を送っています。

● 2020(令和2)年度人間科学研究所構成員一覧

	氏名	所属等
所長	小西 聖子	本学人間科学部長兼人間社会研究科長
運営委員	辻 恵介	本学人間科学部教授
	渡辺 裕一	本学人間科学部教授
	熊田 博喜	本学人間科学部教授
	大山 みち子	本学人間科学部教授
	小西 啓史	本学人間科学部教授
	小嶋 智幸	本学人間科学部教授
	渡邊 浩文	本学人間科学部教授
研究員	岩本 操	本学人間科学部教授
	大崎 広行	本学人間科学部教授
	小俣 智子	本学人間科学部教授
	熊田 博喜	本学人間科学部教授
	五島 直樹	本学人間科学部教授
	中島 聡美	本学人間科学部教授
	西本 照真	本学人間科学部教授
	野口 友妃子	本学人間科学部教授
	稗田 里香	本学人間科学部教授
	藤森 和美	本学人間科学部教授
	北條 英勝	本学人間科学部教授
	泉 明宏	本学人間科学部准教授
	北 義子	本学人間科学部准教授
	木下 大生	本学人間科学部准教授
	小高 真美	本学人間科学部准教授
	城月 健太郎	本学人間科学部准教授
	日野 慧運	本学人間科学部准教授
	矢澤 美香子	本学人間科学部准教授
	永野 咲	本学人間科学部講師
	浅野 敬子	本学人間科学部助教
	今野 理恵子	本学人間科学部助教
	坂入 電治	本学人間科学部助教
	櫻井 真一	本学人間科学部助教
	嶋田 真理子	本学人間科学部助教
	畠山 恵	本学人間科学部助教
	岡 寿子	本学介護福祉別科教員
	小野内 智子	本学介護福祉別科教員
松本 真一	本学介護福祉別科教員	
客員研究員	橋本 修左	本学名誉教授
	北岡 和彦	本学名誉教授
	野村 信夫	本学客員教授
	狐塚 順子	本学客員教授
	堀越 勝	本学客員教授、国立精神・神経医療研究センター：認知行動療法センター長
	磯貝 隆夫	本学客員教授、福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター教授
	小原 収	本学客員教授、かずさDNA研究所臨床オミックス解析グループグループ長
	菅野 純夫	本学客員教授、東京大学名誉教授、東京医科歯科大学・難治疾患研究所・非常勤講師
	夏目 徹	本学客員教授、産業技術総合研究所生命工学領域
	新家 一男	本学客員教授、産業技術総合研究所・創薬基盤研究部門・グループ長
	宮崎 純一	本学客員教授、大阪大学産学連携本部 特任教授
	山崎 美貴子	本学客員教授、神奈川県立保健福祉大学前学長
	山本 雅	本学客員教授、沖縄科学技術大学院大学 細胞シグナルユニット教授
	家村 俊一郎	本学客員教授、福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター教授
	市山 浩二	本学客員准教授、インテグリカルチャー株式会社 研究開発グループ
	河村 義史	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアムJBIC 研究所特別研究員
	若松 愛	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアムJBIC 研究所特別研究員
	立川 公子	本学人間科学部人間科学科非常勤講師

武蔵野大学人間科学研究所通信 | 第9号 |

Newsletter of the Institute of Human Sciences Musashino University

企画編集・発行 / 武蔵野大学人間科学研究所 発行日 / 令和3年3月31日

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



www.musashino-u.ac.jp

武蔵野大学 人間科学研究所
〒135-8181 東京都江東区有明 3-3-3
Tel.03-5530-7448